# 一冊のノート

「おにいちゃん、おばあちゃんのことだけど、このごろかなり物忘れが激しくなったと思わない。ぼくに、何度も同じことを聞くんだよ。」

「うん。今までのおばあちゃんとは別人のように見えるよ。いつも自分の眼鏡や財布を探しているし、自分が思い違いをしているのに、自分のせいではないと我を張るようになった。おばあちゃんのことでは、お母さん、かなりまいっているみたいだよ。」

弟の隆とそんな会話を交わした翌朝の出来事であった。

「お母さん、ぼくの数学の問題集、どこかで見なかった。」

「さあ、見かけなかったけど。」

「おかしいな、一昨日この部屋で勉強したあと、確かにテレビの上に置いといたのになあ。」

学校へ出かける時間が迫っていたので、ぼくはだんだんいらいらして、祖母に言った。

「おばあちゃん、また、どこかへ片付けてしまったんじゃないの。」

「私は、なにもしていませんよ。」

そう答えながらも、祖母は部屋のあちこちを探していた。母も隆も問題集を探し始めた。しばらくして、隆が隣の部屋から誇らしげに問題集をもってきた。

「あったよ、あったよ。押し入れの新聞入れに昨日の新聞と、一緒に入っていたよ。」

「やっぱり、おばあちゃんのせいじゃないか。」

「どうして、いつも私のせいにするの。」

祖母は、責任が自分に押しつけられたので、さも、不満そうに答えた。

「そうよ、なんでもおばあちゃんのせいにするのはよくないわ。」

母が、ぼくをたしなめるように言った。ぼくは、むっとして声を荒げて言い返した。

「何言ってるんだよ。昨日、この部屋の掃除をしたのはおばあちゃんじゃないか。新聞と一緒に問題集も押し入れに片付けたんだろう。もっと考えてくれよな。」

「そうだよ。おにいちゃんの言うとおりだよ。この前、ぼくの帽子がなくなったのも、おばあちゃんのせいだったじゃないか。」

「しっかりしてよ、おばあちゃん。近ごろ、だいぶんぼけてるよ。ぼくら迷惑してるんだ。今も隆が問題集を見つけなかったら、遅刻してしまうところじゃないか。」

いつも被害にあっているぼくと隆は、いっせいに祖母を非難した。祖母は、悲しそうな顔をして、ぼくと隆を玄関まで見送った。

学校から帰ると、祖母は小さな机に向かって何かを書き込んでいた。ぼくには、そのときの祖母のさびしそうな姿が、なぜかいつまでも目に焼きついて離れなかった。

祖母は、若いころ夫を病気で亡くした。その後、女手一つで四人の息子を育て上げるかたわら、児童民生委員や婦人会の係を引き受けるなど地域の活動にも積極的に携わってきた。そんなしっかりものの祖母の物忘れが目立つようになったのは、六十五才を過ぎたここ一、二年のことである。祖母は、自分は決して物忘れなどしていないと言い張り、家族との間で衝突が絶えなくなった。それでも若いころの記憶だけはしっかりしており、思い出話を何度もぼくたちに聞かせてくれた。このときばかりは、自分

が子供に返ったように目を輝かせて話をした。両親が共稼ぎであったことから、ぼくたち兄弟は幼いころから祖母に身の回りの世話をしてもらっており、今でも何かと祖母に頼ることが多かった。

ある日、部活動が終わって、ぼくは友達と話しながら学校を出た。途中の薬局の前で、友達の一人が突然指さした。

「おい、見ろよ。あのばあさん、ちょっとおかしいんじゃないか。」

「ほんとうだ。なんだよ、あの変てこりんな格好は。」

指さす方を見ると、それは、季節はずれの服装にエプロンをかけ、古くて大きな買い物かごを持った祖母の姿であった。確かに友達が言うとおり、その姿は何となくみすぼらしく異様であった。ぼくは、あわてて祖母から目を離すとあたりを見回した。道路の向かい側で、二人の主婦が笑いながら立ち話をしていた。ぼくには、二人が祖母のうわさ話をしているように見えた。

祖母は、すれちがうとき、ほほえみながら何かを話しかけた。しかし、ぼくは友達に気づかれないように、知らん顔をして通り過ぎた。友達と別れた後、ぼくは急いで家に帰り、祖母の帰りを待った。

「ただいま。」

祖母の声を聞くと同時に、ぼくは玄関へ飛び出した。祖母は、大きな買い物かごを腕にぶらさげて、汗をふきながら入ってきた。

「ああ、暑かった。さっき途中で会った二人は・・・。」

「おばあちゃん。なんだよ、その変な格好は。何のためにふらふら外を出歩いているんだよ。」

ぼくは、問いつめるような厳しい口調で祖母の話をさえぎった。

「何をそんなに怒っているの。買い物に行ってきたことぐらい見れば分かるでしょ。私が行かなかったらだれがするの。」

「そんなことを言っているんじゃない。みんながおばあちゃんのことを笑ってるよ。かっこ悪いじゃないか。」

「そうして、みんなで私をバカにしなさい。いったいどこがおかしいって言うの。だれだって年を取ればしわもできれば白髪頭にもなってしまうものよ。」

祖母のことばは、怒りと悲しみでふるえていた。

「そうじゃないんだ。だいたいこんな古ぼけた買い物かごを持って歩かないでくれよ。」

ぼくは、腹立ちまぎれに祖母の手から買い物かごをひったくった。

「どうしたの、大きな声を出して。おばあちゃん、ぼくが頼んだものちゃんと買ってきてくれた。」

「はい、はい。買ってきましたよ。」

隆は、買い物かごをぼくから受け取ると、さっそく中身を点検し始めた。

「おばあちゃん、きずばんと軍手が入ってないよ。」

「そんなの書いてあったかなあ。えーと、ちょっと待ってね。」

祖母は、あちこちのポケットに手をつっこみながら一枚の紙切れを探しだした。見ると、それは隆が明日からの宿泊学習のために祖母に頼んだ買い物リストであった。買い忘れがないように、祖母の手で何度も鉛筆でチェックされていた。

「やっぱり、きずばんも軍手も、書いてありませんよ。」

「それとは別に、今朝、買っておいてくれるように頼んだだろう。」

「そんなこと、私は聞いていませんよ。絶対聞いていません。」

「あのね、おばあちゃん。・・・。」
隆は、今にもかみつくような顔で祖母をにらんだ。
「もうやめろよ。おばあちゃんは忘れてしまったんだから。」
「なんだよ。おにいちゃんだって、さっきまで、おばあちゃんに大きな声を出していたくせに。」
ぼくは、不服そうな隆を誘って買い物に出かけた。道すがら、隆は何度も祖母の文句を言った。
その晩、祖母が休んでから、ぼくはきょうの出来事を父に話し、なんとかならないかと訴えた。父は、ぼくと隆に、先日、祖母を病院につれて行ったときのことを話しだした。
「おまえたちが言うように、おばあちゃんの記憶は相当弱くなっている。しかし、お医者さんの話では、残念ながら現在の医学では治すことはできないんだそうだ。これからもっとひどくなっていくことも考えておかなければならないよ。おばあちゃんは、おばあちゃんなりに一生懸命やってくれているんだからみんなで温かく見守ってあげることが大切だと思うよ。今までのように、なんでもおばあちゃんに任せっきりにしないで、自分でできることぐらいは自分でするようにしないといけないね。」
「それはぼくたちもよく分かっているよ。だけど・・・。」
これまでの祖母のことを考えると、ぼくはそれ以上何も言えなくなった。
その後も、祖母はじっとしていることなく家の内外の掃除や片付けに動き回った。そして、ものがなくなる回数はますます頻繁(ひんぱん)になった。
ある日、友達からの電話を受けた祖母が、伝言を忘れたため、ぼくは友達との約束を破ってしまった。父に話したあと怒らないようにしていたぼくも、このときばかりは激しく祖母をののしった。
それから一週間あまりすぎたある日、捜しものをしていた僕は引き出しの中の一冊の手あかによごれたノートを見つけた。何だろうと開けてみると
それは、祖母が少しふるえた筆致で、日ごろ感じたことなどを日記風に書き綴ったものであった。見てはいけないと思いながら、つい引き込まれてしまった。最初のページは、物忘れが目立ち始めた二年ほど前の日付になっていた。そこには、自分でも記憶がどうにもならないもどかしさや、これから先どうなるのかという不安などが、切々と書き込まれていた。普段の活動的な祖母の姿からは想像できないものであった。しかし、そのような苦悩の中にも、家族と共に幸せな日々を過ごせることへの感謝の気持ちが行間にあふれていた。
『おむつを取り替えていた孫が、今では立派な中学生になりました。孫が成長した分だけ、私は年をとりました。記憶もだんだん弱くなってしまい、今朝も孫に叱られてしまいました。自分では気付いていないけれど、ほかにも迷惑をかけているのだろうか。自分では一生懸命やっているつもりなのに・・・。あと十年、いや、せめてあと五年、なんとか孫たちの面倒を見なければ。まだまだ老け込む訳にはいかないぞ。しっかりしろ。しっかりしろ。ばあさんや。』
それから先は、ページを繰(く)るごとに少しずつ字が乱れてきて、判読もできなくなってしまった。最後の空白のページに、ぽつんとにじんだインクのあとを見たとき、ぼくはもういたたまれなくなって、外に出た。
庭の片隅でかがみこんで草とりをしている祖母の姿が目に入った。夕焼けの光の中で、祖母の背中は幾分小さくなったように見えた。ぼくは、だまって祖母と並んで草とりを始めた。
「おばあちゃん、きれいになったね。」
祖母は、にっこりとうなずいた。

（北鹿渡文照）

出典：道徳教育推進指導資料（指導の手引）４　中学校読み物資料とその利用
―「主として集団や社会とのかかわりに関すること」―　平成６年３月　文部省